

平曲吟譜新集

卷十

横笛

平家正節二之下、名古屋伝承句



本コンテンツは、文化庁の委託業務として、平曲研究所が実施した平成21年度芸術団体人材育成支援事業 鳴海家本「平曲吟譜新集」に関する情報交流 の成果を取りまとめたものです。
従って、本コンテンツの複製、転載、引用等には文化庁の承認手続きが必要です。

匂
老梅よ小松の三位の中物維盛の口を
身柄ハ八嶋の磯ヨ在るうら心ハ只都へのく
そ通れども故口ヨ止め並みひし北の方稚き
人この其面影のこ身ヨ密と立派で有る
隙も無しりしか有ヨ申渡せ哉我身武逆
寿永二年三月十五日の曉起ゆつ八嶋

へ
初空 山豈すう山侍よ都へ上う恋みの者
共在も今う一夜見まし見へばやとハ思ひれ
れがだ叔父卒ニ位の中物重衡の母乃
生捕よせりれて、衣縫食心を晒みふぐ
よ口惜よ 中初空
血をあやさん事もひ夏迎千度心ハ進め
共心ろよ心ろを鬪競て高野の後山よこそ

の依をバ潛よかすて換ニ兵閣重京
童石堂丸舟よ心得られバ冲合入武里
彼等三人を石岡て阿波の玉造城の浦
の路へ趣きあひる下ケ傳門の沖を潜遇て紀伊
姫の神と頭れ立る玉津嶋の明神日前
國懸の波音を過て紀伊湊よこそ着玉

參じあへ 口説

高野より年來知る所

有り

三条の秋後危局の義頼父子の高後
口時頼迎え小松坂の侍ひて十二の年
本不へ急うて建礼門院の難仕
様笛と云女を有遊に従ひ最悪す父化
由を傳へて身あらんせよ有人の聲も
隨てお仕あひどをも心安ふやきやんと
し者も名をのこゆて目よい見す老少不

居てか由望者を見初てあんぞ強ちよ
下 滅ル水バ游ロヤシルハ 西王母と
云し人皆ハ有て今ハセト東方朔とゆ
ベ

し者も名をのこゆて目よい見す老少不
定の世の中ハ只石火の光よ異成だ
長命と雖も七十をば過ぎ其の身よ身
の盛ん成事ハ終ニ二十余年也 中音
多

幻しの世の中よ醜き者を片時も見て仰
りやん思ひぬ者を見んと久しうば父の命を
也よ似て是善知後中アセ也めじ浮世
を厭眞の道よ入あんよハ連十九の年誓
り切て嵯峨の往生院よ初ひ後院とぞ居
とうる口説 楠笛笛曲を傍へゆて我をこ
そ捨の容を以て換ひる事の恨みよ縦

ぎ淺猿の障子の隙より眼て見れば福
八露袖ハ涙よ洒て滅よ尋兼る有
模心成道心者も心弱も成ぬ可人を
あて全く是よハ去率世若門遠すも
やひうふりん連絲よ達てぞ ハツヒ
模笛法螺恨し乞也備も有可事
成ぬ巴間を押て都へ帰多ひゆう其後

ゆづれをすむにあらへ
成程御彼不^主よとて虎^上尋^上氣^上をせを怒^上
白居^主位^主荒^上る僧房^主は念^上涌^上の聲^上
志^主るを^主廻^上口入道^主が^上か^上よ^上成^上て換^上の換^上
望^主らんをも今^主一度見^上もし見^上へ余^上り見^上
り^主よ^上まう^上いこそ是^主造^上余^上て侍^上へと具^上くと
る女^主を以^上て云^上や^上うれ^上ハ廻^上口入道^主胸^上打^上駿^上

謡口に入道 下ノ 同宿の僧ニ語るハ
もせよ教え念佛の障礙ハ
施て別し女ニ化す様を見へてひらひら
紙一度こそ心強いさくせん又も氣きふ事有あリ
最さいど心も傷いたきひりひあんだ
て迎峠峨とうとうをばあて高野たかのへ參さん清淨せいじやう心こころ
院いんすぞ居ゐうるる 落おち 横よ竹たけも板いた換かわぬ

三十すも成ざるが老僧あは夜ゑと詠雲
染よ回じか蓑沙衣香の烟よ條杏り臘象
よ身ひ入る道心者羨まや慕や思ひれけん

初夏

晋の七賢漢の四皓を住む高山竹林
の有様も是よハ遇じとぞ見へし

口説
トヤ
上コ
お詫びの遅口入道
上コ
三位の中將を見奉
上コ
コ

高野卷